

## 九 私の国会報告

第二十二国会も去る七月三十日いよいよ幕を閉じました。百三十五日間に上る長い国会でありました。通常国会またはそれに相当する臨時国会が終りますと、有権者の皆様に、その御報告を申上げるのが、代議士としての私の第一の責任であると存じまして、これまでも実行してまいつたのでありますが、本日は、第二十二特別国会で問題になった主なる案件と、この特別国会をめぐるわが国の政局や経済界の現状をどう見るべきか、また今後それはどういう方向に推移するものか、私の見るところを率直に申上げたいと存じます。

去る二月の総選挙における立会演説において、私は、皆様にこう申上げたのであります。「抑々この総選挙は一体何を目標に行われているかということについて、一般に明確な導標をもっていないように思われます。ある人々は何でもこの選挙は、鳩山内閣とその与党である日本民主党の公約を吟味して、鳩山内閣を信任すべきかどうかを決めるべき選挙であるという風に理解されている向があります。私は率直に申しまして、それはこの選挙の主たる目的ではないと思

ます。今日民主党と鳩山内閣は、大きい魅力的な公約を掲げて、皆様に訴えています。私をしていわしむれば、かかる公約は実現の見込の乏しいものであります。この選挙で民主党が仮りに勝ちましても、到底衆議院における過半の議席をとるなどということは夢のような話であります。

一方、国会には衆議院の外に第二院としての参議院が厳存している。しかもその二百五十名の参議院議員は、この総選挙の勝敗如何に拘らず、その資格を保有するものであります。しかるに民主党は、その二百五十名の参議院議員のうち僅かに一握りの二十一名しかもっていないのであります。そういったしますと、民主党の選挙公約なるものを、予算案その他の法律案の形で、国会を通過、成立せしめる上にとつて、鳩山内閣と民主党は、全然確信をもっていないことが、今の段階においてはつきり判り切っているわけです。

しかも一方、政策を実行するには、それ相当の財源を必要といたします。金のかからない政策というものは全然ないのであります。苟も与党としての民主党が、大きい選挙公約を掲げる以上は、これに要する財源はいくらいくらで、その財源はどうして調達するか、の目論見を予算案の形で具体的に提示して皆様の御判断を仰ぐのが民主的方法だと思ひますが、予算編成の時日を十分持ちながら、敢えて、それをなそうとせず、単に宣伝戦で、皆様から投票をかちとろうという態度は、単に民主的でない許りが皆様を愚弄する態度であると断ぜざるを得ないのであります。

それでは一体この選挙は、何を目標に闘うものであるかといえ、申すまでもなく、国会を肅正するための選挙であるといわなければなりません。去年の六月、衆議院において、社会党両派の手によって、本会議の議事を進めさせまいとするいまいましい乱闘事件が起りました。本会議を開いて、賛否の討論を展開し、票決をすると、社会党両派の主張は少数の故を以て否決になることが明らかであるので、暴力に訴えて、本会議の議事を進めさせないために、女性の代議士を議長席につけ、多数の社会党議員がスクラムを組んで、堤議長の着席を以て阻んだのであります。

この事件は、国会の品位を傷けわが国の民主主義の前途に大きい不安を投げかけたものとして、内外からきびしい批判を受けたのであります。そこで六月十五日、社会党の和田、浅沼両書記長は、それぞれの社会党派を代表して、本会議を通じ国民に謝罪することによって、一応のけりがついた事件でした。この事件があつてから、国内には、いち早く衆議院を解散して、国民の手によって、肅正国会を新しくつくり上げる必要があるという世論が湧き上りました。その世論の圧力に応えんとするのが、抑々この総選挙であると私は思います。

国会断想  
以上のようなことを、当時私は皆様に申上げたのでありますが、愈々二月二十七日、開票してみると、民主党は一八五の議席をとり、自由党は一一二という転落ぶりを示し、乱闘国会の張本

人である社会党左派は八九に飛躍したのであります。計り難いものは人心であると思ひます。

しかし、私の申上げたことには謬りがありませんでした。鳩山内閣は衆議院に一八五、参議院に二一の与党をもつて、わが自由党の協力なくしては、法律案一つも通過成立せしめる力をもたないことがはっきりしたのであります。

三月中旬に、第二十二国会が召集されて、われわれは第一に議長選挙にとりかかりました。自由党としては、ともかく民主党が第一党になったのであるから、民主党から議長をお出しになるようにとの申入れをしました。しかし、この国会は肅正国会であるから、その長に相応しい徳望のある人を推薦されたいという註文をつけたのであります。というのは、この前の選挙の後、自由党は圧倒的な第一党であつたが、はるかに勢力の劣る改進黨は、社会党と密通して堤議長を押し立て、自由党は議長と副議長を共に失うというにがい経験があります。憲政の常道からいって、かかる不当な慣例を再び繰り返してはならないという配慮から、第一党たる民主党に議長候補の推薦を申入れたのであります。

民主党から議長候補として提示がありました人は、他ならぬ三木武吉先生でありました。衆議院議長という公職は、民主政治の最高峯に位する重職で、総理大臣に匹敵するものであります。英国においては、一度衆議院の議長をつとめると、その人は終身議員たる特権を与えられるとい

う具合に、この地位を高いものにいたしておる位です。私は、同郷の先輩である三木さんが、愈々功なり名遂げて、議長になられることは結構であり、老政治家三木さんの最後を飾るに相応しいことだと思ひ、自由党の友人達に三木議長に同調していただくよう微力を尽したつもりです。

三木議長については、緒方総裁以下幹部の間では特に反対はなかつたのですが、若手の議員の間から戦前、東京都のある事件に三木さんが連坐しているという証拠をあげて反対を唱える向きがあり、党議は、もう一度人選を考えなおしてほしいと民主党に申入れることになりました。ところが民主党側では組閣工作との関連もあり、最早これ以上人選しにくい、あくまでも三木氏を推して行きたいとの返答がありましたので、自由党としては、仕方なく独自の益谷候補を立てざるを得ない破目になりました。その結果は、御承知の通り、益谷さんが勝つて、三木さんは敗れたのです。

益谷秀次氏と三木さんの二人を比較してみると、その雄弁において、その才腕において、その政治的閱歴において、問題なく三木さんが優位におられます。唯肅正国会の長としての徳望という点においては、遺憾ながら、三木さんは、益谷さんにおよばなかつたのであります。日本の政治というものは、中央においても、地方においても、最後には徳というものが、ものをいうものであるということ、この事件を通して、私は学ぶことができたのであります。

しかし、この前後を通して、三木さんの態度は、実に立派であつたと思います。三月十八日の議長選挙の当日、三木さんは珍しくフロックコートを着て、登院されておりました。申すまでもなく三木議長出現に百パーセントの自信をもたれてのことであり、愈々議長になると、背の高い席について就任の御挨拶をされる場合には、和服では都合が悪いと思われてのことであつたと思います。それほど彼が確信をもっていた議長戦に敗退の已むなきに至つたのであるから、常人であれば、ふさぎこんでしまうのが常であると思うのですが、三木さんは翌日から昨日のことは全く忘れてしまつたように、淡々として、総務会の仕事に精進されておりました。心のよく練れた立派な態度だと私は感服いたしました。

次にわれわれは総理大臣の選挙にとりかかりました。俗にこれを首班指名といっていますが、誰が首班になるかは、もう既に答えが出ていたのです。即ち、二月選挙で第一党になつた民主党の総裁鳩山一郎氏が首班になることは、予め決定していたわけです。それがあらぬか、鳩山さんは、三月十日過ぎから、いち早く、組閣工作を進め、三月十八日頃には、最早、閣僚名簿ができ上つていたようです。三月二十一日、われわれも、最後には鳩山一郎氏に一票を投じて、第二次鳩山内閣が誕生いたしました。

唯、私はこの首班指名にからんで、鳩山さんの態度は立派であつたとはいえないものがあるよ

うに思われず。吉田前首相は自由党が選挙で圧倒的第一党をかちとった時でも、首班指名があるまでは、謹慎して組閣工作にはとりかかれなかつたのです。それが政治のエチケットといふべきものでしょう。それに鳩山さんの場合は衆参両院とも非常な劣勢であるのだから、これからの国会乗切りには自由党の協力が絶対に必要であるわけです。だから首班指名までじっと謹慎されていて、指名を受けると同時に自由党を訪問し、連立内閣の申入れをされるべきだと思ひます。それは責任の分界をはつきりさせる意味において自由党から一蹴されるにちがいないと思ひますが、よしそれが蹴られても何とか閣外協力の懇請を繰返し繰返しやって、しかる後、仕方なく単独内閣で行かざるを得ないという国民の諒解をひきよせておいて、組閣にとりかかれることが、その後の国政運用に役立つのではないかと私には思われました。鳩山さんという人は、どうも物事の運びようが軽率であるように思われてなりません。

断 想  
会 断 想  
国 断 想

それはともかくとして、今申しましたような態勢で、鳩山内閣は第二十二国会に臨まざるを得なかつたわけです。そして、この二十二国会は、終始一貫、自由党に主導権を奪われて、予算案その他重要法案のあるものは修正をつけ、重要法案のあるものは審議未了の憂目を見るといふ極めて不成績な国会であり、後半においては、民主党は全く自主性を欠いた醜態を暴露した有様でした。

私は、この国会報告において、皆様に、民主党と鳩山内閣の無能ぶりを追及して、快哉を叫ぶとは思いません。それほど私は野暮ではない積りです。民主政治というものは、結局数の政治であります。両院において劣勢な民主党と鳩山内閣が無能であるのは当然であります。立場を替えてわれわれが第一党になりまして政権を預つた場合においても、程度の差こそあれ、両院において劣勢の立場にある限り、十分の仕事ができる筈はありません。唯私がここで鳩山内閣と民主党に上げたいことは、かような事態に立至ることが、選挙の当時からハッキリ判つていながら、大きい口をきいた選挙のやり口は決して賞められたものではなく、不真面目であつたということです。選挙は、もっと真面目にやるべきであり、そうしないと政治はちつともよくならないのだということなのです。

それでは、一体、これからの国政をどのようにまとまりをつけて行かねばならないかということが当然、問題になるのであつて、保守合同ということが、大きく取上げられている所以は、ここに直接の原因があるわけです。尤も、この保守合同問題は、すでに去年の三月当時の自由党内閣副総理緒方竹虎氏が、保守合同は、現下の状況においてらん頭の急務であると提唱して、当時の改進黨、日自両党に呼びかけたのがその発端であります。改進黨、日自両党では、保守二大政論を堅持する一派がありました。大勢は保守合同には賛成であるが、自由党の主張するように総



裁公選ということになると吉田氏が総裁になるに決っているから反対であるということ、自由党執行部の努力に拘らず、結果をみる事ができなかったのであります。そして去年の十一月二十三日、遂に反吉田勢力を集めて、日本民主党が結成されるに至り、保守勢力は自由と民主の両党に分断されることになりました。しかし三党が二党になったのですから、そのいきさつには感心しない節々もありましたが、このことは保守結集への一つの前進であつたと思ひます。

去年の十二月七日、吉田内閣は人心一新のために総辞職し、その後を承けて、十二月十日、鳩山民主党内閣が誕生し、二月選挙で民主党が勝つて、第二次鳩山内閣が三月二十一日でき上つたのであります。しかるに越えて四月、第二次鳩山内閣が船出の艦装を整えている時に、早くも三木武吉先生は、保守合同の必要を唱え、もし保守合同の邪魔になるようなら、「鳩山は何時やめさせてもよい」という爆弾宣言をいたしましたのであります。この三木老の憂国の至情にほだされて、自由党も、去年以来自ら提唱して失敗しました保守合同に再び腰を入れることになつたのであります。

## 断 想 会 国

そのために、新党準備金ができ上り、七月には政策を脱稿し、八月から九月にかけて組織をとり上げ、目下鋭意準備を進めております。しからはこの保守合同は、一体でき上るのか、でき上らないのか、またでき上るとすると、何時いかなる形ででき上るかということですが、これは今

の段階において、私には見当がつきかねます。恐らく鳩山さんも、緒方さんも、また当の三木さんも、はっきり御返答ができないのではないかと思います。唯、これだけのことは申上げられると思います。国民一般は保守の合同を、早天の慈雨のように待ちこがれています。この大きい世論の圧力がかけられているし、鳩山、緒方両総裁が、東京、大阪、名古屋の三大都市において、打揃って演壇に立たれ、保守合同の必要と決意を表明されている以上、右と左に泣き別れという最悪の事態に立至ることは、最早なかりうと思われません。と云って、一人の脱落者も出さないで完全なる合同ができるようにも私には思われません。

今次の保守合同の立役者は、何と云っても三木武吉先生であります。三木さんという人は、世間で大狸だといわれております。またあの人のいわれることにうっかり乗っておればえらい目に会うから、余程警戒することが肝心だともいわれ、自由党内でもそのような感触を三木さんにもっている人も少くありません。しかし私の見るところでは、過去はともあれ、今次の保守合同に取組んでおられる三木さんは、生命がけであり、真剣であると思えます。「俺は最早先が短い。もう総理大臣になろうとも思わない。唯この三木は、死ぬる前に、一つええことをして死にたい」と三木さんは口癖のようにいっている。そういえば、あの骸骨のような体躯をもって、お、か、ゆ、をすすりながら、肩で息をしている三木さんである。「先が短い」といわれることに嘘いつわりは

ないと思います。また一つええことをして国家と国民に奉じたいと念慮することも、人間三木の自然の人情でもあるうと思われれます。俺は大きくだまされてはいないかと何度も何度も自分の身をつねってみるのですが、私は、現在の三木さんが、伊達や酔興でこの大問題と取組んでいるようには決して思えません。三木さんは本当に生命がけでやっておられる思います。その証拠に、保守合同という一つのとも、しびは消えなんとしても消えることなく、その燃焼をつづけているではありませんか。私は率直にいつて、三木さんの憂国の至情に敬意を表すものであります。

次に本国会で成立をみました予算について御報告申し上げます。二月選挙において、私は、民主党の公約を見て、皆様に次のように申上げました。即ち「政策の名に値する政策は実現可能なものでなければなりませんし、またその実行には巨大な財源を必要とするものであります。従つてよだれのたれるようなスイートな公約を伺つて、随喜の涙を流してはいけません。国民は、その政策の遂行に要する財源をどうして調達するかということにつき聞き糺さなければなりませんし、またそれを問いただす権利をもっているわけです。人あつて、その金は、何等の反対給付を伴わないで、私の政治力で、米国からとつてきますといふのであれば、それも一案でしょうが、米国といえどもそれほどお人好しではないはずで、然らばその財源はどうするかといえ、結局、現在やっている仕事をやめて財源をうかすか、あるいは増税をするかどちらかです。ところ

が現在やっている仕事をやめるとか、役人の数を減らすとかいうことは、言うは易く行うことは難しいものです。またそれは大きい社会的抵抗をうけ、選挙戦術から申しても不利だといわなければなりません。増税をするといえば、これは大変なことで、先ず選挙で敗ける覚悟をしてかからなければならぬほどの冒険です。だから新しい財源を要する公約を掲げるということは、真面目に政治を考える以上は、生易しいことではないし、国民もまたこれを易く受け容れてはいけないわけです。例えばタバどこかで随分御馳走になってよかったと思っていると翌日になって、その料理屋から勘定書が届いたとしたら、われわれは失望と後悔を催すにちがいないからであります。

民主党は、予算の伴わない公約を掲げてこの選挙を戦っております。いわば答案を示さないで試験に応募しているような格好です。それを知らずにこの拳に出たのであれば、それは無知の謗りを免れませんし、知ってこの戦いに臨んだというのであれば、国民を愚弄するも甚しいと申さねばなりません。ところが、一万田蔵相は正直です。一万田さんは来年も一兆円予算を組むと申しました。一兆円予算とは、われわれ自由党内閣が、本年編成し、目下実行中の予算であります。一兆円は一兆円です。この予算で実のある新政策が果敢に実行されるものではありません。従って私は、今次の選挙における民主党の公約は、言葉の上で如何に魅力があつても、実行上大きい

限界をもち、大して期待ができるものではないと思ひます。」

以上のようなことを私は、二月選挙における立会演説を通して皆様にも申し上げたのでありますが、四月二十五日に政府が提出した予算は、一万田さんのいわれた通り、一兆円予算案でありました。その予算書を繰いて点検してみると、案の定、新しい政策を果敢に打出すことができないばかりか、人口や学童の自然増の影響をうけて、既定経費を相当削減しなければならぬような破目になつておりました。例えば農業委員会は壊滅に類しておりましたし、ある同僚代議士が、同じ立会演説会において農村の有権者に力強くその実現を公約された「めい虫防除費補助」は跡形もなく削減されておりました。しかし私は若干の異論は勿論ありますが、本筋において予算はこれではないのだと思ひました。新奇を追う政策が皆国民のためになるものでは決してありません。反対に内閣が變つても、政策の本筋に大きい狂いのないことこそ、国家と国民の利益になると思つております。何となれば政府の政策が年と共に猫の眼が變るようになつては、国民は事業を営む場合においても、家計をやりくりする場合においても、一向に目安が立たないので、迷惑至極であるからです。そこで自由党は、この予算案の細目に若干の修正を施して、七月一日、この予算案を成立せしめたのであります。

## 断 想 会 国

次に、この国会で一番やかましく論議された問題は申すまでもなく外交問題でした。鳩山内閣

は、その組閣と共に日ソ国交調整をうたい、選挙に臨みました。われわれは日ソ国交調整の時期未だ熟せずとして、自重論を唱えたのであります。われわれの主張いたしましたところは、こうであります。

第一に外交は国際信義の上に立脚しなければなりません。ソ連という国は、どういう国かと申しますと、卑近な話が昭和二十年八月九日、日ソ不可侵条約（その条約文の中には、この条約を破棄しようとすれば、その当事者は他方に対して一カ年の余裕をおいて予告する義務をもつていた）を一方的に破棄し、赤軍を満州に進め、われわれ同胞が二十年間嘗々と築き上げた生産設備、輸送設備その他の有価物を大量に運び去り、多くの同胞を捕虜として連行し、これに強制労役を課する一方、赤化教育を施して、漸く近年に至り、その生存者の計画的送還を行っている国です。外交交渉においては、比類なき古強者であり背信国です。そういう国を相手にするのであるから余ほど用心してかからねばならないと同時に、主張すべきところはあくまでも辛抱強く主張する用意と決意がなければならぬと思います。争点である在ソ邦人（敢えて捕虜とか戦犯とかの言葉を用いない）の送還や領土問題において特にそうであります。

それよりも、この日ソの国交調整はどういう利益になるかということをよく計算してかからなければなりません。世の中には日ソ貿易や中共貿易によって、日本経済の危機が突破できるよう

なことを主張している向もあります。思わざるも甚しい暴論であると思います。御承知のように日本は、棉花、羊毛、重油、燐鉱石、鉄鉱石、等々の原料の全部または大半と、二千万石に上る主食を海外に仰がなければやって行けぬ国であります。そうしなければ日本の工場の煙突から煙が消え、労働者が失業し、国民の生活水準はたちまちがた落ちになる国であります。しかるにその原材料乃至食糧の大部分はいわゆるドル圏に仰いでおります。ソ連や中共は日本にそれらを輸出する余力をもち併せておりません。そしてそれは戦後にのみみられる現象ではなく、戦前からそうであります。

かくて輸入した原材料に加工し、その一部を再びポンド圏を主力とする地域に輸出することによつて得られる外貨を以て、翌年の原材料および食料を輸入するわけです。日本の経済は、宿命的にそういう構造をもっているのです。してみれば日本経済の自立と発展は、一にこの外国貿易がうまく行くか行かぬかにかかっているわけです。そのことを考えてみると、日本の外交政策の基調は、あくまでも米国をはじめ自由主義国家群との親善関係の維持増進におかれなければならぬことも自明の理であると思えます。国内一部人士の主張するところにおもねて、日本の外交政策が、ソ連や中共との調整に偏向し、自由主義国家群との間が聊かの冷却を示すようなことになると、これは国家の命運にとって由々しい問題であります。

西独のアデナウアー首相は、対ソ国交調整のために、モスコーに赴くに際し、ワシントンに飛び、米国の他自由主義国家と十分に打合せを遂げ、彼等の十分の諒解と支持の下に対ソ交渉に臨みました。しかるに、わが鳩山内閣は卒然と日ソ交渉を決意し、松本全権を直接ロンドンにおける日ソ交渉に派遣しました。もとより重光外相がその後渡米し、日本に他意なき旨の諒解をとげたものと思われませんが、鳩山内閣の日ソ交渉態度は、日比賠償におけるその態度と併せ軽卒の二字に尽きるといわなければなりません。

更に、われわれが注意しなければならないのは、日ソ国交調整の直接の利益が何であるかということ事です。なるほど国交調整それ自体は結構なことですが、これによつて受ける経済的利益は殆んど数うるに足らない半面、ソ連は何百人という外交官特権をもつた大使館員を東京狸穴の大使館に派遣し、近年逐次増大している平和攻勢の時流にのつて、日米離間、保守勢力と国民の離間その他の対日政策を果敢に実施に移すことが予想されます。このことも、目下の国内情勢からいつて、十分警戒してかからなければならぬことだと思ひます。

最後に日比賠償の問題であります。これは日ソ交渉とその趣を異にしているので一概に論難できるものではありません。率直に申して、私は、日比賠償問題の妥結を一日も早く計らねばならないと考えている一人です。というのは、日比間には利害の衝突ということは一切ないのであ



ります。日本はフィリピンの資源を欲します。フィリピンは日本の工業製品と技術を求めています。比国の資源を開発しその国民の所得が増せば、それだけ日本品の市場が形成されるわけです。日本経済の自立は、日比の緊密な経済提携によって両国が謂わば一つの経済単位を形造ることによって、始めて可能になると申しても過言ではないのであります。

賠償は反対給付の伴わない財物の全的喪失であるように一般に理解されている向があります。しかし、これは誤りであります。賠償は謂わばポンプの呼び水のようなものであって、賠償というルートを通して ガットその他の国際条約の制限を超克して わが国の商品と技術の種を蒔き、これが縁由となつて日本の商品の市場が拓かれて行く筋合のものです。そういう意味において、日比賠償はいち早く解決し、日比両国の経済交通の軌道を敷設しなければなりません。鳩山内閣の軽卒な交渉態度は責められるべきですが、その論難に徒らなる日を空費することなく、一日も早く解決しなければならぬ問題であると思ひます。

以上、第二十二国会を廻る主なる問題を御報告申上げたのでありますが、これから皆様の御質問をうけて、その応答を通して洩れている問題に対する私の見解を申上げることにはいたしたいと存じます。御静聴を感謝いたします。